

毬栗

泉鏡花作

—

人の妻なりし、よき君の世を避けて隠れ住みたまふよし。いつも閉したるまゝなれば、隠れ家の門内を見たるものなかるべし。門を潜れば古井戸あり。井げた、雨に朽ちて苔蒸したるに、ひしと蓋して、其上を磐石もて壓へたり。こゝより見附の式臺までは半町ばかり距りたらむ。右には竹垣を結ひたり。左に小さき藁小屋ありて、爐のふちに髪白き老夫一人、ゆたかに胡坐かきて柴折りくべつ。小屋の傍に一本の檜の大樹ありて、爐の煙薄くその梢を籠めたり。

樹蔭の開戸を潜り入れば、芝の園見ゆ。梅五六本ありて、地の色すべて赤し。

井戸また一つあり。老木の楓、井の頭に臨みて、あたりを蔽へるなかより、弓形の石の橋あらはれて、築山の岩にかゝれるが、水は涸れて、芝はこゝにも

生ひたり。

縁少し見えて、朱塗の欄干に二葉三葉いま散りかゝる。夏は白百合の丈高きが咲く。柴折戸の際に、枇杷を植ゑたり。この柴折戸の外は、見渡す限り、萩、薄の原とも見ゆ。桔梗、刈萱、女郎花、いろ／＼に咲き亂れつ。月もこゝよりやのぼるべき。庭のはてなる森のなかには、風の音常に絶えず、恰も海鳴を聞くが如し。

中庭とこの裏庭とを隔てたる一帯の土塀につきて、左の方にめぐり行けば、路四五間があひだ竹藪なり。通り越せば檜と藁小屋とならびたる、其側にはあらぬ處、一方の庭の入口に至りつべし。

眞闇き土臭き藪をまれて、奥の方に、人のものいふが幽に聞ゆ。

「もうそんなに深い處へ入らつしやつては恐うございますよ。私は、もう、恐いんですもの、あれ。」
といふ／＼聞えずなりぬ。

折から花やかなる夕日影の、大檜の梢より、斜に小屋の屋根を照したるに、曇りもせで、大粒の雨まばらに、ばら／＼と降り出でつ。一しきりさつと竹

藪やぶに音おとたてしが、時ときの間に晴はれて茜あかねさしたり。同どう時じに、

「きいッ。」

と魂たまぎ消こる聲こゑして、竹たけの葉は一いつ齊せいに烈はげしくゆれつ。眞ま蒼蒼になりたる腰こしもと元ひとり一人、取とり亂みだして、藪やぶの中なかより轉ころび出いでたり。老おやぢ夫ぢは爐ろにいぶる煙けむりの中なかより、窪くぼみたる眼めを光ひからして透すかし見みつゝ、

「何どうさした。これ、何なんとさした。」

と怪あやしみ問とふ時とき、まだ十と歳をばかりなる美び少せう年ねんの續つづきて藪やぶより走はしり出いでつ。

「何どう遊あそばしたの。私わたしや、はんとに、まあ、およし遊あそばせと申まをすのに、ずん／＼奥おくへ入いらつしやつて、はあ／＼思おもつてる處ところへ、だしぬけに、わつとおつしやるんだもの。」

と胸むねを撫なでゝ、身みのふるひ止とどまらず。

美び少せう年ねんも息いきをつきぬ。

「あの中なかにお前まへ、深ふかい／＼谷たにがあつて、水みづが少すこし流ながれて居あるの、其そ處こにねお前まへ、あれ、」

と井いの上うへを蓋ふたしたる磐ばん石じやくを見み遣やりて言いひぬ。

「あれよりか少し小さな、赤い色の蛙が居てね、
背中の筋が黄金の色をして光つて居たもの。」

「お父は眉を顰めて頷きたり。」

「もう一足踏込んで見さつしやれ、危い、それそ

こだ。」

里さとのわかもの壮わ伎かの一人いちにんは、不ふ意いにほ頬ほをさ刺さされて、苦あと叫さけびて背うしろ後のに退のきたり。門もん内ないよりうち出いだすくり栗いのが毬あられ霰の如ごとく、五にんむら七が人なか群なかる中なかへばら／＼と亂みだれかゝるに、驚す破はや天てん狗くの暴あるゝわと、あわてふためき、ひとなだれにどつと遁にげぬ。

山さん中ちゆうの森もりに早はや日ひの入いりつ。秋あきの日ひの暮くれかゝる隠家かくれがの門もん前ぜんの廣ひろ場ばには、松まつの葉は一ひ葉との塵ちりもあらず、うつくしく筭ほ目ぎ立たつ。あたりは寂せきとして、もの靜しづかに、鳥とりの鳴なく聲こゑも聞きえず、人ひとのけはひもせで、なほ栗くりの毬いの縦じゆう横わうに門もん内ないより飛とび出いでゝ、門もん前ぜんの此こ處ゝ彼かしこ處こに落おち留とりては、二ふたつ、三みつ、二ふたつ、三みつ、おなじ處ところにかさなり合あふあり、遠とほくそれで見みえずなるあり、地ちの上うへにころげるあり、樹きの枝えだに插はさまるあり。入いり交ちがひて、凡およそ五ぶん分じ時じばかりの間あひだ、絶たゆる隙ひまあらざりき。

やゝありて其その止やみたる時とき、黄た昏そるゝ門もんの黒くろき色いろの、それかとも見みえわかぬに、美うつくしき少年せうの顔かほ、ほのかに白しろくあらはれて、外との方かたを透すかし見みつ。

そのうつくしき顔を一目見るより、壮佼の一人の、
わなゝき／＼、門柱にひたと身を忍びて、密に様子
をうかゞひたるが、わつと絶叫して遁げ出せり。
不意の物音に、彼の兒、驚きたる面色なりしが、
こけつまるびつ行く後姿を見送りて、につこと笑み
ぬ。

時に遙なる森の中より、途絶え／＼洩れ聞ゆる鱗
爪の音せり。

少年は隠れ去りつ。

しばしありて、盛装せる武官の、従者一人も従へ
で、徐ろに手綱を操り、暮れ行く森を背にして、こ
の門近く進み寄りぬ。

さやかに輝くは勲章なるべし。駒の進む毎に、き
ら／＼と揺れて胸に鳴れり。

やがて、近くに寄りて、大杉の下に駒の頭を乗り
入れたる、梢に颯と風立ちて、雨のなごり霽の如く
ばら／＼と亂れかゝりつ。

前足を空に嘶ける、一聲高く、じりゝと後にすさ
りたるを、

「叱！」とばかりに乗りしづめて、又しづ／＼と

打つて進め、門近くに來りて、ふとその手綱を控ふるトタンに、毬栗の一つ空を飛びて、頬のあたりを掠めたるを、よげざまに右手に掴みて、屹と見て微笑みぬ。

駒はまた嘶けり。

將軍はひらりと身を軽くおりたちつ。たて髪を撫で、乗り捨て、佩劍の柄を握るともに、靴音高く近寄りて、ひたと門の扉に耳をあて、顔をば少し傾けぬ。

裡は寂として音なかりき。

一足退きて、もと來し方なる山の端を仰ぎしが、再び耳をおしあてぬ。

静さは、嚮にも増したり。

將軍はまた傍に寄りて身をすさらしつ、仰ぎて門の屋根を視めたるが、更に耳をつけて聞きぬ。

同時にけたまひしき聲音の、一人ならず二人三人、鳥の立つらむ氣勢して、母屋の方に遠ざかりたる。

其のちは葉の落つる音でもあらず。

暗くなる時、火の影ぱつと立ちて、將軍のうつく
しき鬚、其光にうつりしが、既に馬上にありて、葉
巻の薰ぞ四邊を籠めし。

鱗爪の音木精に響きて、悠々と引還し、森を潜り
て見えずなりぬ。

月の光梢をすべりて、落散りたる葉の毬、ひとつ
／＼に影さしたり。

【完】